

橋の上のアルト

げんさい

はじまり

それはそれは小さな星だった
深い海の底であったなら、きっと誰も見つけられまいと思われる
それはそれは小さな星だった

「だけれども、お前を」

深い男の声である。

「私は見つけたよ、アルト。そしてその名を、もらおう、彼のために。」

こうして、私は生まれたのだ。

嗚呼、コ・シュトーロ。
あなたを待つばかりの日々が過ぎて、ついに私はひとつきり、橋の上にいるのです。

1 霧の日の客

その日は、なんだか霧っぽい日であった。海からの湿った風が、そのまま街を濁らせてでもいるような錯覚に、道行くものは皆、そろって憂鬱な表情で歩いていた。

__ゲ・ト・シュツィオ 「始まりの街」。三方を海に囲まれ、一方に山を背負った賑やかながら小さな街。この街ですれ違うほとんどの者は非定住者である。海行く者は船に乗り、山行く者は馬車を使い、あるいは歩き、やってくる。温暖なこの土地で田畑を耕し、海山の幸を獲得する民は旅人に親切だ。

「あなたも、運の悪い人だ」

チョッキの胸ポケットから懐中時計を取り出して、丸眼鏡の男は苦笑まじりに言った。

「ここは確かに時折こんな霧がありますがね」

ちらりと視線を上げ、隣を歩く男の表情を確かめる。何も返事はなかった。

「この季節はもっと穏やかですよ。春ほどではないですが、他所の方がたくさんいらっしゃる。ですが今日は皆さん早々に宿を決めたようですね。この霧ではいつもより暗くなるのも早そうだし」

時計は午後の5時2分を示していた。シュツィオの秋は、通常あと1時間もすれば夜になる。重苦しい雲と霧のせいで、丸眼鏡の男は、早々に家に帰りたいいらしかった。

「店も早仕舞いらしいですね」

観光客に向けた露店が売れ残りの菓子やら果物やらを箱に詰めるのを大げさに指さしてみたが、隣の男は相変わらずまっすぐに前を見つめたまま、何も答えはしなかった。

(先に帰ってしまおうか)

今年9つになるひとり娘と、その母親が、今頃は芋の皮をむいているだろうとか考えながら、今日唯一の客を改めて見返した。この丸眼鏡の男は、ここから10分も戻れば看板の見えてくる、小さな宿を営んでいる。20分程前、天気が悪いので早めに看板に火を灯そうと外に出たところで、早速客を捕まえた。

客は、背が高かった。宿の主も男として小さくはなかったが、話をするには少しばかり顎を持ち上げなくてはならなかった。柔らかな栗毛は海風と太陽にさらされる地元の者のそれとは比べ物にならず、瞳は吸い込まれそうに青い。旅人らしく外套を肩にかけていたが、その肩幅と、時折のぞく手首の太さから、程よく鍛えられた肉体が想像できる。どこかに落ち度はないものかと探すのも嫌になるような美形であった。

(あいつも騒ぐに決まっている)

いつもより余計に夕食の材料を倉庫から持ってくる女房を思い出して、ため息をつく。「まあ、この街は初めて？主人に案内させますね」なんて上擦った声で背中を押すもんだから、つい作り笑顔で一緒に外に出てしまったが、なんだか並んで歩くと自分の存在が恥ずかしいように思われてきた。すれ違う女どもが皆振り返るように感じたが、その何人かは自分が見えていないのだろうか、などとも思った。

(何を話しかけても返事もない。先に帰るか)

案内と言ったって、何処に行きたいとか、何をしたいとか、そんな話があった訳ではないのだ。夕食の支度をする前の僅かな時間...たぶん女房が化粧をやり直す時間稼ぎのために、この美形の客を外に連れ出す口実に使われたのだと、少し腹が立ってきた。この客人が美しいからと言って、金もありそうだと言って、自分がずっと隣り合って歩く必要はどこにも無かった。

「あの...えーと、そう、お夕食の仕込がございますので、失礼して...」

「失礼してもよろしいですか」と言いかけたとき、初めて栗毛の客人は丸眼鏡の宿屋に切れ長の目を向けて、口を開いた。

「時刻は、何時ですか」

厳しい言い方ではなかったが、今までまったく反応がなかっただけに、主は眼鏡の下の細い目をほんの少し丸くした。

「え?...あ、そうですね、あと1時間半程でしょうか」

我ながら曖昧な答えだと思ったが、客人は納得したらしくうなずいて、

「18時には戻るようにしましょう。結構ですね。では後ほど」

短く告げると小さく頭を下げて、もうまた先を見つめて歩き出そうとする。

(本当は外に急ぎの用でもあったかな?)

もしそうであったなら、同行して悪いことをしたかもしれない、と、主は思った。こちらが勝手に(正確には女房が無理やりに押し出したのだが)ついてきて、相手が自分よりも優れた外見であったので、少しばかり嫉妬していただけなのだ。落ち着いて見れば、表情も声も穏やかで、身なりもきちんとしている。悪い男ではなさそうだった。

「シェマー (お客さん)、シェマー・ベリアニルド !」

「ベリアニルドさん」、宿帳に記入された見事な筆跡を思い出しながら、初めて名を呼ぶと、呼ばれた相手は律儀にもこちらへ戻ってくる様子である。丸眼鏡の宿屋は慌てて続けた。

「この霧では、きっとパシェ・タルト は見えませんよ！それに港近くの酒場が船乗りで混雑していますから、そちらは行かない方が良いでしょう！」

東の海に沈む古代遺跡の一部が、海面から顔を出していて、それがこの街の観光業を支えている。1000年前に沈んだと言われる魔法と機械の国を、人々は「パシェ・タルト (星の遺跡)」と呼んでいた。古い文献に度々あらわれる「ゲーツア・タルト (星の国)」に由来する。

優れた文明で世界に絶大な影響力を持つ国だったが、3代で滅びた。原因はわかっていない。残された遺跡には今も強力な魔法がかけられており、外敵の進入を阻んでいるという。そのために調査団が近づくこともできず、本当に遺跡がその国のものなのかも、実際のところはわかっていなかった。

一説には滅亡のとき、八つの星が世界中に飛んだという。その星が再び集ったとき、遺跡を守る魔法はとかれ、封じられた富とともに国が甦るといっておとぎ話を世界中の人間が知っていた。

遺跡は、美しかった。波にあわせて七色に光を反射し、1000年もたっているとは到底思えない輝きで、「星の国」という名が実に似合っていた。おとぎ話を信じる信じないにかかわらず、人々は遺跡を見にこの街にやってくる。

ベリアニルドという呼びづらい名のこの客人も、きっとそうだと宿屋は思っていた。先ほどから彼が見つめていた道の先には、まさにその遺跡が見える教会があるからだ。教会を過ぎると港があり、通りには船乗り相手の酒場や安宿が多かった。

「船乗りは荒っぽいのが多いですからね。揉め事に巻き込まれるのは嫌でしょう。今夜はそれほど海が荒れることはないでしょうが、霧が晴れることもなさそうです。パシェ・タルトを見るならやはり太陽か月がきれいな時が良いですよ」

結局宿の主人のところまで引き返してきてしまった客の横を歩いていた女が、何気なく男の顔を見上げ、顔を少し赤らめて足早に去っていく。

「パシエ...?」

当の男は、そんな女にはまったく気がつかない様子で、青い目を数度瞬かせた。「遺跡」という言葉に、意外そうな顔をしている。意外なのは、宿屋の方である。

「遺跡を見にいらしたのでは?」

今度はまだ若い少年たちが、霧で少し湿ってしまったらしい地図を見ながら港の方からやってきて、通り過ぎていった。丸眼鏡の端にその姿は見えていたが、宿にさそうのを男は忘れた。目の前の男が、とぼけたことを口走ったために。

「それで、あちらが賑やかだったのか。港に大きな船でも来たのだと思っていました。それなら少々、見てみたいな、と思ったのです」

至極まじめな顔である。本当に知らなかったらしい。

「この街には、どうして...」

遺跡を見に来たのでなければ、この街に知り合いでもいるのだろうか。それならば、自分のところのような小さな宿に泊まることはない。遺跡の他には、それなりに景色もいいし食べ物も美味いが、これといって特産のない街である。商売人には見えない。他の土地に用がある者は、こんな小さな街に滞在はしない。陽のある内に隣町にでも行くだろう。

そんなことを宿屋の主が考えていると、客人はその丸眼鏡の顔をじっと見つめて、

「この街が、シュツィオ（始まり）という名前を持っているからです」

それだけを答えた。

「おかえんなさいまし」

結局そのまま何処へ寄ることもなく宿へ戻った丸眼鏡の主人と栗毛の客人を出迎えたのは、幼さの残る娘であった。父親と同じ丸眼鏡を低い鼻の頭に乘せて得意そうにお辞儀をしたところは、

もう一人前にお客様にあいさつができるのだと言いたげだったが、客の顔を見るなりパツと頬を染めた。

「アリュージュト・フオ・ツェナルト　（感謝致します）」

自分よりもずっと背の高い男が、恭しく頭を下げるので、余計に顔が赤くなる。自分のところのような安宿には似合わない雰囲気、すっかり照れてしまったらしい。

「申し訳ない。こら、カレリナ、下を向いては失礼だろう！」

父親に叱られて顔を上げると、不思議そうに自分を見つめる青い目にまた緊張してしまう。「やっぱり恥ずかしい！」と子どもらしく訴えた。

「私、何かしたのでしょうか」

「いいえ。...強いて申し上げると、ちょっとうちには大げさでした」

背中に隠れようとする娘を押し出しながら、父親が笑った。

「うちみたいな小さな宿で、そんなに堅苦しく過ごすことはありませんよ」

その頃になってようやく女房が奥から出てくるのが見えた。こちらは既に顔を知っているし、今大げさと言われたばかりであるから、栗毛の男は黙って頭を下げるだけにした。それだけでも女たちには嬉しいようで「すぐにご案内を」なんてソワソワしている。案の定、いつもはしない口紅をして、よそ行きにとしまいでいた服を着ていることが、主を更に笑わせた。よく見ると、娘も先日買ってやったばかりの髪飾りをつけていた。

（まったく、ふたりとも相手が美形だと思うとこれだからなあ）

それでも自分と所帯を盛ってくれた女房には感謝している。気の強い女だが、この辺りではそこそこ美人で通っていたし、働き者で、自慢の女房だった。娘も学校の成績は良いし、家の仕事は手伝ってくれるし、母親に似て良かったと心から思っているから、この丸眼鏡の男は家庭で女ふたりに逆らうことだけはしなかった。

眉のキリリと上がった女房に比べて、主は温厚な顔立ちをしている。どちらかと言えば童顔で、いかにも人の好きそうな人物であった。客の相手もだいたい自分です。旅人の少ない日には外に出て、客を呼び込むのも大抵は主人の仕事であったが、今日はつい、ベリアニルドだけになってしまった。幸いにして、女房にそのことで責められることはなさそうだ。一番の心配事がな

くなって、丸眼鏡を軽く持ち上げ安堵のため息をつく。先ほど預かった荷物を片手に、客人を部屋へ案内した。

「え？それじゃアルトーリオはパシェ（遺跡）を見に来たんじゃないの？」

栗毛の客人__アルトーリオ・ベリアニルドは、他に客もないので、宿屋の主家族と一緒に夕食をとりたいと提案した。小さな食卓を4人で囲むと、娘の緊張もとけたらしい。こうなると子どもで、もうすっかり打ち解けた様子である。宿の客というよりは、親の友人が訪ねてきたような気持ちになっていた。

「この街に来てパシェを見ないなんて」

カレリナはフォークをにんじんに突き刺しながら言った。

「あたし、ここで生まれて、ずっとここに住んでるけど、もう何回も見たよ。何回見てもきれいなもの！」

少女にはキラキラ輝く遺跡が、まるで宝石を散りばめたように見えるらしい。世界にあれ以上美しい物はないと思っている。それを見にたくさんの人が訪れるのが誇らしく、世界一美しい遺跡のすぐそばに自分が住んでいて、いつでも見たいときに見に行けるのが自慢であるらしかった。だから、他所から来たはずの、それもあの遺跡みたいに美しいこの男が、遺跡を見にこの街を訪れたのではないと聞いて、心底驚いた。

更にひとつ、カレリナは、この男には遺跡を見るべき理由があると思っている。あの場所がただの有名な観光地であるのみならず、この客人だけの特別な理由があるのだ。これはカレリナに限らず、両親も思っていることだった。

「あなたはパ・バルツァ（八つ星）の名前を持っているのだから、行かなくっちゃ絶対だめ！」

例のおとぎ話に出てくる、国が滅びたときに散った星のことである。八つの星は、それぞれに海、空、花、砂、石、橋、本、風の欠片が星になったものと伝わっている。すべて最後の国王が愛したものだと言われていて、俗っぽくてロマンチックじゃないな、なんて、カレリナは考えることもあったが、それでもパ・バルツァ（八つ星）は特別なものだとは誰もが思っていた。何しろ集まれば財宝につながるのだ。

おとぎ話では、八つの星はそれぞれに己を守護する人を選び、代々の守り人がその名を星とともに継いでいく。来る時、守り人が星を持って集うと星は鍵となり、魔法の扉を開くのだ。伝説にあやかろうと、子どもに星の名をつけたがる親は多かった。

「アルトーリア...アルト・トオロ・イア（橋の上の星）。そうでしょ？」

「ええ。その通りです」

カレリナがもったいぶって一語ずつ区切って発音するのを別段気にする風でもなく、微笑を口元に浮かべたままうなずいた。予想に反し淡白な反応にがっかりしたのか、少女は今度はじゃがいもを口に放り込んで頬を膨らませた。

「娘の言うとおりですよ」

ナプキンで軽く口をぬぐって、女房が気取った声を出した。

「もったいないわ。あなたのお名前、アルトーリア・ベリアニルド ...ベリアニルドは青い夜...きつとご両親はこの街にいらっしゃるのを夢見て、パ・バルツアの橋の名を付けられたんだと思いますわ。ねえ、あなた？」

「ああ。私もこの街に住んで長いが、あなたほどふさわしいお客様は初めてですよ。名前だけじゃない、そのお名前が、アルトーリアさん本人にとっても似合っていると思うんです」

世辞ではなかった。おとぎ話の星の名前を持つのにピッタリの美形であったし、青い瞳は月に照らされた夜空のように深い色をしていた。この男がああ遺跡の見える教会の大窓の前に立っているのを想像するだけで、なんだか眩しいような気がしてくる。

「アルト口と呼んでください、気軽に」

相変わらずの微笑で、アルトーリア・ベリアニルドは言った。

「そんなもったいない！」

カレリナが食べ終わった食器を下げようとしていた手を止めて、代わりにテーブルを叩いた。その声あまり大きいので、母親がたしなめたが、本人はあまり気にする様子はない。力は弱かったが、わずかにグラスと皿がまだカチャカチャと震えている。

「パ・バルツアの名前を、そのままつける親って、意外と少ないのに！あたし思うんだけど、本当は代々の守り人のだけの名前でしょ？恥ずかしくってつけらんないじゃないかな。それにちょっと呼びづらい名前だもん」

興奮した様子でカレリナは続けた。

「でも...ううん、だから、あたし、あなたのことはちゃんと”アルトーリア”って呼ぶ！だって珍しいもん、正式な名前の人。学校にいっぱいいるの、アルトなんかって名前の子はね。なのに正式にパ・バルツァの名前の子はひとりっきやいないんだよ」

「ひとりはいるんですね？」

「そう！ひとりだけいるの！」

それまで静かに聞いていたアルトーリアが、初めて反応らしい反応を示したので、カレリナは嬉しくなって身を乗り出した。

「こら、カレリナ！お行儀が悪いわ！」

「ごめんなさい」

母親に叱られて、一応席に座りなおしはしたものの、手元がそわそわと落ち着かない。物心ついた頃からパシェ・タルト（星の遺跡）のおとぎ話が大好きで、絵本がぼろぼろになるまで読み、泣いて買い直してもらった程の少女である。

「でもお母さんも知っているでしょ？ほら、魚屋さんのとなりに住んでる子。あの子、アルトフィーレナっていうの」

「アルトフィーレナ」

口の中で繰り返して、アルトーリアは食卓に飾られた花の一本に長い指で触れた。

「アルト・フィーレン（花咲く星）の守り人の名ですね。その人は、あなたと同じ年？」

「興味ある？」

問いかけに、はっきりとうなずくのを見て、少女もまた笑顔でうなずいた。

「ひとつ年下なの。この前、フェスト（祝福）を受けに行ってたって。でもあの子、パ・バルツァじゃなかったみたい」

「はっはっは！」

大真面目に語る娘の言葉を黙って聞いていた父親が、ここで堪えきれずに笑い出した。

「当たり前だよ、カレリナ。その子が本物の守り人なら、その先代がその子の近くにいたことになるだろう。そんなら、この街中で大騒ぎになって、もう毎日お祭りみたいになるぞ！」

どうやらこの父親は、娘とちがって、おとぎ話などは信じていない様子だった。

「ここに住んでそれなりになるが、アルツアル・リングル（星の鐘）が2度以上鳴ったのを聞いたことがない！」

言いながら立ち上がって、ひょいひょいと全員分の皿を重ねていった。「今、食後のお茶をお持ちしますね」と一言添えて奥へ引っ込む父親の背中に、カレリナがペーッと舌を出すのを見て、アルトーリアはフ、と笑ってしまった。小さな笑い声を聞かれはしなかったが、勢いよくカレリナがまた振り返ったので、母親の頬を少女の髪がかすめる。

「そーだ！アルトーリア、あなたならきっとリングルも2回鳴るよ！ね、一緒にフェストに行こうよ！」

「いや、私は...」

「ね、いいよね！」

もうすっかりその気でカレリナがはしゃいでいるので、アルトーリアは困った顔で母親の顔を見た。その目線の意味は正しく察したが、彼女も娘の案が気に入ってしまったらしい。一応は万歳でもしそうな娘の手を押さえはしたが、目を輝かせて、アルトーリアに向き直った。

「あなた、この街のフェストはご存知？」

「いえ。どの街のものも見たことはありません。...パ・バルツァを見分けるものだと聞いたことはありますが」

うふふ、と、何が嬉しいのか女は笑った。

「そんなの、迷信でしょうよ。でも、あたくし、好きなんです。フェストはどこの街でもパ・バ

ルツアを見分けるなんて言っているけれど、みんな受けられるのよ。本物だろうが偽者だろうが」

娘が「本物は絶対いるもん！」と抗議しているが、軽くあしらっている。いつものことなのだろう。

「教会に行って、シュクルト（教会専属の魔法使い）様がいらっしゃれば、その場でお願いして、誰でも祝福してもらえます。この街のものは特にきれいなんですよ。わたくしも、あの人と結婚するときはフェストをやって頂いたわ。ふたりとも名前に星のホの字も入っていないのに」

「そうそう。ただ、その人の人生に星の加護があるようにと、お祈りして頂くためのものですからね」

奥から主人が茶器を持って戻ってきた。茶葉のいい香りが狭い食堂に満ちていき、外の霧のことなどすっかり忘れて、あたたかな気持ちになってくる。一緒に運んできた菓子の入った籠から、カレリナは真っ先にお気に入りのクッキーを取り出して勝手にアルトーリアの皿に置いた。

「これおいしいよ。アルトーリアって名前のお菓子なの」

「アリュージュト（ありがとう）。同じ名前の菓子ですか。いただきます」

薄い長方形のクッキーの上に、星の形の飾り砂糖が三つ乗っていた。なるほど、橋の上に星を乗せたようにも見える。

「教会の前のお店で売っているお菓子。このお菓子を持ってフェストを受けたけど、リングルは一回しか鳴らなかったんだけどね」

少女の無邪気な告白に母親が噴出した。

「去年の誕生日？そんなことしていたの？」

「そうだよ」

当たり前前に少女は答えた。8つの誕生日に、教会でフェストを受けたらしい。パ・バルツアの伝説にあやかって、8にかかわる記念日には、特に盛大に祝う習慣があった。

「もしかしたらパ・バルツァの名前の物を持っていけば、何かちがうかもしれないでしょ？なんにもなかったけど。アルトーリア、あそこの教会のフェストではね、アルツァル・リングル（星の鐘）っていう、すごく大きな鐘を鳴らすの！宝石がいっぱいついていて、とってもきれいなんだよ！」

父親のついでくれた紅茶に、たっぷりミルクと砂糖を入れながら、カレリナは楽しそうに教えてくれた。

「その宝石はね、ぜんぶ魔法がかかっているんだって。前にリリュー様が言っていたんだ。あ、リリュー様っていうのはね、あの教会のシュクルトの中で一番えらい人！」

「3人しかいないんですけどね」苦笑して、父親が耳打ちをしてくれた。教会専属の魔法使いであるシュクルトの仕事は様々で、占いや病気の治療、歴史書の編纂など、多岐にわたる。大きな教会では数十人、数百人のシュクルトを抱えるところもあるというが、この街の教会は小さい。世界中にいるシュジュウカ（魔法使い）の中でも、特に優秀で教養のある者しかねないという噂だが、こうした小さな街では「みんなの先生」くらいの位置づけなのかもしれないなかった。

「リリュー様が言ったの。パ・バルツァは本当にいるんだって。だからフェストはあるんだって。フェストはね、いつもリリュー様が難しい呪文を言って始まるの。そうするとリングルがいつもよりもキラキラ光りだして、その下にフェストを受ける人は立つんだよ。大きな窓からパシェ・タルト（星の遺跡）が見えて、すごいきれいなんだあ」

目を閉じて、その光景を思い出しているようだ。両親もそれぞれに自分たちの記憶をたどっているらしく、アルトーリアが紅茶の湯気の奥から、ほんの少しだけ目を細めたのには誰も気がつかなかった。

カレリナは、目を閉じたまま続けた。

「リリュー様がさっと合図をすると、他のシュクルト様たちがリングルの紐をひくの。すごくきれいな音が街に響いて、海を渡って...リングルの光がもっともって強くなって見えて、最後にリリュー様が魔法の粉をかけてくれるの。それから一週間はどんな小さな怪我だってしない、星の粉なんだから」

「素敵ですね」

アルトーリアが少しの音も立てずにカップを置いて言った。それから、やはりアルトーリアという名の菓子をひとつ、改めて嬉しそうに眺めてから口に入れる。すかさず、カレリナが「こっちはもっと甘いよ」と、少し生地の色が明るい種類を皿に置いた。

「パ・バルツァがそのフェストを受けたらね」

自分の皿には、その「もっと甘い」方をみつつとって、ひとつをミルクたっぷりの紅茶にひたす。じんわりと液体がしみて、クッキーがふやけて更に甘くなるのを待った。

「リリユ様が星の粉をかける前に、もう一度、リングルが鳴るの」

じっと、手元の菓子を見つめながら、カレリナは言った。

「シュクルト様が紐をひくんじゃないの。ひとりでに鳴るんだって。パシェ・タルト（星の遺跡）が鳴らすの」

「聞いてみたいな」ひとりごとのように呟いて、十分に甘さのしみたクッキーを取り出した。飾りについた星は溶けてしまっていたが、その分、カップの中は甘くなっただろう。

アルトーリアは、先ほどカレリナが置いてくれた菓子をつまんで、一口に食べた。なるほど、ひとつめよりも甘く、ほのかに柑橘系の香りがした。「カレリナ」、相変わらずの微笑を消すことなく、アルトーリアは前の席で両手でカップを持つ少女に呼びかけた。

「教会の前のお店には、この他にも美味しいお菓子を売っているんですか？」

たぶん、あともう何年か後に出会っていたら、カレリナはこの不思議な旅人に恋をしていたかもしれない。青い瞳にじっと見つめられて、まっすぐに見つめ返せる女など、きっとこの世にはいないだろうと苦笑しながら、宿屋の主は湯気でくもった丸眼鏡をぬぐった。